

担い手通信

2024
vol. 6



子実コーンどうなの 支援のあり方

田でも畑でも助成を

子実用トウモロコシの産地から目立つのが、国の助成金への要望です。「交付金がメインの作物。減額や、なくなるなどすれば、採算がとれないという声が農家から上がっている」（青森県七戸町）などと、助成の在り方が今後の生産を大きく左右する、との声があります。

現状、水田転作で子実用トウモロコシを生産する場合、国の転作助成である水田活用の直接支払交付金で、10アール当たり3万5000円の助成が受けられます。一方、農水省は、5年の間に一度も水張りをしない農地は、交付対象から外すルールを設けました。

このルールがある一方、子実用トウモロコシの安定生産には水はけが重要なだけに「水を張ろうと思えば張れるが、透排水性の悪い農地になってしまう」（北海道子実コーン組合）との声が上がります。同交付金の対象から外れても「支援が出る方向性を早く示してほしい」（同）と訴えます。

畑地で生産する農家からも要望が上がる。畑地の場合、麦・大豆などは、国の畑作物の直接支払交付金（ゲタ対策）で生産数量当たりの交付金が得られるが、子実用トウモロコシは対象外です。2023年産の子実用トウモロコシ35ヘクタールの大部分を畑地で生産したセブンフーズ（熊本県菊池市）は「収支を合わせるのも限界がある」とし、ゲタ対策のような数量当たりの交付金を求めます。

機械や保管施設も課題

田での栽培では、水張りをして水田活用交付金を受給しつつ、子実用トウモロコシの安定生産を目指す動きも進みます。宮城県のJA古川は、子実用トウ

モロコシと大豆、水稻を輪作する体系の構築を探ります。水稻は乾田（畑地）状態で直播（ちよくは）栽培し、水はけの悪化を抑える狙いです。トウモロコシと大豆で使える播種機は「追加でカスタムすれば水稻もまける」（JA）ため、こうした農機導入への支援を訴えます。

収穫したトウモロコシの保管施設の整備に対して後押しを求める声も、滋賀県子実コーン組合や富山県のJAいなばから上がります。一層の増産には、耕種側に保管施設を設け、畜産農家にトウモロコシを定期的に供給できる体制の構築も課題になっています。

（日本農業新聞 2024年1月17日）

子実用トウモロコシへの助成の状況



水田転作
の場合

水田活用の直接支払交付金

3.5万円/10aを助成
※5年間水を張らなければ、交付対象外に

畑地で
生産の場合

畑作物の直接支払交付金（ゲタ対策）

子実用トウモロコシは対象外

産地の声

- 水を張ると排水性が悪化する。水田活用交付金の交付対象から外れても支援を
- 畑地での生産にもゲタ対策のような支援を
- 水を張っても排水性を保てるよう、水稻の乾田直播と子実用トウモロコシ、大豆での輪作を目指す

（取材などを基に作成）